

芥川龍之介「舞踏会」の立ち位置 —ピエール・ロチ「江戸の舞踏会」によりながら—

山下 祐里奈

一般に芥川龍之介「舞踏会」(1920)がPierre Loti, *Un Bal à Yeddo* (1889) (以下、「江戸の舞踏会」と記す)に題材を得ているということとはよく知られている。定説¹によれば、芥川は「舞踏会」の執筆にあたり、英訳本ないし高瀬俊郎訳『日本印象記²』(1914)を参照し、ロチの原著には触れていないと結論付けられている。しかしフランス語にも多少の嗜みがあった芥川³が原著にも目を通していた可能性は無視できるものではなく、これまでの研究史においてどのように「江戸の舞踏会」に接したのかは明確にされていない。

では芥川はどういった立ち位置から「江戸の舞踏会」を用いたのだろうか。「舞踏会」は、「江戸の舞踏会」でたびたび登場するような「模倣」にすぎないのだろうか。それともロチへの「オマージュ」だったのだろうか。さらに言えば、「パロディ」であったと捉えるべきなのだろうか。

作家だけでなく海軍軍人という側面をも同時に持っていた西洋人、ロチのオリエンタリズムの視線は、様々な形によってテキスト内に散りばめられている。そういった世界を、そのまなざしの受け手であった日本人の芥川が「舞踏会」としてリライトしていく中で、印象の修正を行っていたこともまたこれまでの先行研究でたびたび指摘される通りである。

本論文では、その修正を4つの観点から分析していく。まなざしの受け手である日本人、芥川龍之介はどのように反応し、「舞踏会」を成立させたのか。東洋／西洋のまなざしの差異に加え、東洋／東洋のまなざ

穴

しについても考察を深めることにより、新たな視覚からこの問題を照らし出せるのではないか、というのが本論の目的である。

「舞踏会」「江戸の舞踏会」に加え、「舞踏会」執筆以前に刊行された2作品、飯田旗軒訳『陸眼八目⁴』（1894）、高瀬訳『日本印象記』をテキストとし、それらを用いながら、考察分析を進める。また「江戸の舞踏会」の引用時、必要に応じて括弧を用いて拙訳を対応させていく。

1では、鹿鳴館の描写から「舞踏会」が「江戸の舞踏会」を下敷きにしており、芥川がロチの経験したまさにその日を「舞踏会」で描き出そうとしたことを改めて確認し、尚且つ、芥川が「舞踏会」から「江戸の舞踏会」に見られる東洋の評価を取り除いている点を指摘する。

2以下の章では、両テキストに揃って登場する「日本人」「フランス人」「中国人」をキーワードに設定し、まなざしの交錯をさらに深めていく。

2では、まず中国人に焦点を当てる。「江戸の舞踏会」「舞踏会」で描かれる中国人の違いに着目し、ロチが見る明治時代の中国と芥川が見る大正時代の中国を、西洋と東洋の2つのまなざしからどのような相違点が見られるかを考察する。

3.4では、日本人に着目する。3では「江戸の舞踏会」を含むロチの日本を舞台にした作品群にも典型的な形で登場する猿に例えられた日本人について。

4では3とは対照的にロチが称賛の声を上げた伝統的な日本を纏った日本人を取り上げる。芥川が「舞踏会」執筆において伝統的な日本人の描写を削除した理由とは何であろうか。これらの分析を進めることにより、芥川龍之介の「舞踏会」執筆に隠された意図を示したい。

1.

全 ピエール・ロチ「江戸の舞踏会」は1886年11月3日⁵の鹿鳴館におけるロチの舞踏会の経験を書き記したものである。芥川龍之介「舞踏会」

はこれを典拠とした作品であり、この小説の物語世界も同年同日の出来事であると受け取ることができる。周知のように、鹿鳴館は1883年に井上馨による欧化政策の一環として建設されたものである。このヨーロッパ建築を模した鹿鳴館は、欧化政策が大きな広がりを見せていた時代を象徴する一つであった。

「江戸の舞踏会」「舞踏会」が同年同日の出来事であると述べたが、2作品を比較した場合の本文共通箇所は14例である。内、鹿鳴館内部の描写に依ったものが8例、舞踏会に訪れた人物たちの服装、又は身分に対するものが3例。鹿鳴館までの道のりの描写、舞踏会で踊られた曲名、その他描写が各1例であり、建物や人物などの内部の様子に関するものが多くを占める結果となった。次の引用は内部の描写と服装から1例ずつあげる。

「舞踏会」

今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上つて行つた。明るい瓦斯の光に照らされた、幅の廣い階段の兩側には、殆ど人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造つてゐた。菊は一番奥のがうす紅、中程のが濃い黄色、一番前のがまつ白な花びらを流蘇の如く亂してゐるのであつた。さうしてその菊の籬の盡きるあたり、階段の上の舞踏室からは、もう陽氣な管弦樂の音が、抑え難い幸福の吐息のやうに、休みなく溢れて來るのであつた。

「江戸の舞踏会」

Les salons sont au premier étage, et on y monte par un large escalier que borde une triple haie de chrysanthèmes japonais dont rien ne peut donner l'idée dans nos parterres d'automne; une haie blanche, une haie jaune, une haie rose. Dans la haie rose, qui couvre la

突

fleurs sont larges comme des soleils. La haie jaune, placée en avant, est moins haute, et fleurie par grosses touffes, par gros bouquets d'une éclatante couleur bouton d'or. Et enfin, la haie blanche, la dernière, la plus basse, fait comme un parterre tout le long des marches, comme un cordon de belles houppes neigeuses.(84)

(サロンは2階である。そこへは我々フランスの秋の花壇では思いつきもしないような日本菊の三重の籬、白色、黄色、桃色の籬に囲まれた大きな階段をのぼる。壁を覆う桃色の籬では、菊は樹木のように高く、太陽のように大きく咲いている。その前面にある黄色の籬は、まばゆい金色の蕾が。そして一番手前にある低い白色の籬は、雪のように白く美しい房が、階段に沿って花壇のように作られている。)

「舞踏会」

明子はすぐに父親と分れて、その綺羅びやかな婦人たちの或一團と一しょになつた。それは皆同じやうな水色や薔薇色の舞踏会服を着た、同年輩らしい少女であつた。

「江戸の舞踏会」

Ces demoiselles Arimaska, ou Kounitchiwa, ou Karakamoko, sont en robe de gaze blanche, ou rose, ou bleue, mais ont toutes la même figure; ...(93)

(このアリマスカ嬢かコンニチワ嬢かカラカモコ嬢たちは白やピンクや青といったドレスを着ていたが、みな同じような顔立ちであつた。)

叁 階段に咲いた菊であつたり、令嬢たちのドレスの色であつたりと、こちらの引用も殆ど同一の内容であることが確認できる。飯田訳、高瀬訳

と比較してみても、多少の差異は見られるものの、双方において同様の描写が登場した。つまり芥川は「江戸の舞踏会」に描かれた舞台を一切変えず、「舞踏会」の世界を描いた。これはロチが経験した鹿鳴館で行われた舞踏会そのものを、芥川が意図的に描こうとしていたと言え、芥川が「江戸の舞踏会」に「舞踏会」の題材を求めたことは間違いない。

ただし、このように作品の細かい描写をロチが経験した舞踏会の出来事にのっとりながらも、芥川がロチという西洋人の近代日本に対するまなざしの全てを模倣することは決してなかった。それは芥川が取り入れることのなかった鹿鳴館の描写部分から見ることができる。

「江戸の舞踏会」

Eh bien, il n'est pas beau, le Rokou-Meïkan. Bâti à l'européenne, tout frais, tout blanc, tout neuf, il ressemble, mon Dieu, au casino d'une de nos villes de bains quelconque, et vraiment on pourrait se croire n'importe où, à Yeddo excepté....(83)

(それで、鹿鳴館というものは美しいものではなかった。西洋風に建てられ、すべてが白く、真新しい。まったくどこかの温泉街のカジノに似ており、これが江戸以外にあっても良いように感じる。)

Ils sont vastes, ces salons, mais médiocres, ils faut au convenir; une décoration de casino de second ordre. (87)

(サロンは広いが、ぱっとしなく、2流のカジノのようで相応しくないものであった。)

ロチは鹿鳴館を新しさはあるものの、自国の舞踏会のような伝統や威厳が見受けられず、まるで「温泉街のカジノ」のようであると評価した。また内部に関しても「二流の」と付け加えるほどであり、明らかに「相
応しくないもの」としている。ここで芥川が原著のほかに参考にしたと

される高瀬沢『日本印象記』の該当箇所も確認する。

『日本印象記』

でろくめいかんそのものは、美しいものではなかつた。總てあつさりしてゐて、白くて新らしい。が悲しいことにそれは何處か温泉場の遊樂場に似てゐる。で實際この土地に、えどにゐることゝ何の關係があるのだらうと思はれるのである。

これらの舞踏は、廣くはあるけれども平凡で、第二級の遊樂場の裝飾を思はずにはゐられない。

『日本印象記』にも *casino* に対応する「遊樂場」という単語がみられることから、芥川自身が鹿鳴館に対するこのようなロチの評価を目にした可能性は極めて高い。しかしながら「舞踏会」においてこういった外観やそれに対する印象というものが描かれることは一切なかった。「江戸の舞踏会」からその題材を借りながらも、芥川はそういったロチからの日本の劣等性への言及を周到に取り去っている。こういった差異こそが西洋と東洋とのまなざしの交錯であることは間違いない。改めて確認すれば、鹿鳴館とは西洋近代の外に位置していた日本が、西洋に倣おうと自らの社会や文化を欧化しようとする矛盾を根本に抱えたものであった。つまり鹿鳴館とは近代化に伴う西洋と東洋の文化がせめぎ合う場所であったところでは位置づけられる。

両者とも開花した日本の象徴の一つともいえるこの鹿鳴館での同年同日の出来事を、ロチは当時を生きた西洋人として、芥川は未来に生きる日本人として、別の視座から描いているのである。

三 2.

「江戸の舞踏会」では新横浜駅から品川駅まで向かう電車を待つ最中

に、*"et ces invités, dans des salles d'attente pareilles aux nôtres, s'abordent en français, en anglais, en allemande. Tout ce qu'il y a de moins japonais, …(79)"*（待合室にいるわたしのような招待客たちは、フランス語や英語、ドイツ語と様々な言葉で話しているにも関わらず、日本人は殆どいなかった。）という描写が見られる。つまり鹿鳴館の舞踏会にはドイツ人やアメリカ人ないしイギリス人、その他諸外国の人物たちも招待されていたことがここでは言及されている。しかし「江戸の舞踏会」の作中に登場する明確な人物といえば、「日本人」「フランス人」「中国人」のみであった。「フランス人」のロチ、観察対象の「日本人」のみでも物語が進むにも関わらず、舞踏会場にいた「中国人」に対する言及も多く含んでいる。なぜロチはここに「中国人」についての描写を残したのだろうか。ここには「フランス人」ロチの「中国人」に対するまなざしを窺うことができる。そして「舞踏会」もまたこの「中国人」の描写についてほぼ踏襲している。描かれるスタンスは異なるものの、「舞踏会」においても「中国人」というものが大きな意味を持っている。

こういった観点から、以下の章では「日本人」「中国人」「フランス人」の3つのキーワードを巡り、その複雑な様相を記述していく。本章ではまず「中国人」に焦点を当てる。

「江戸の舞踏会」における中国人の描写は2例である。1例は服装など外面的な事柄に関する文章であり、これに関しては後に扱う。もう1例は中国人に対するロチのまなざしが窺えるものであった。後者を以下に引用する。

「江戸の舞踏会」

Tous ces yeux chinois, rendus un peu insolents peut-être par les récentes affaires du Tonkin, nous regardent, étonnés de notre arrivée. Nous les regardons aussi, et nous voilà, nous dévisageant les uns les

三

autres avec ces curiosités froides et profondes de gens appartenant à des mondes absolument différents, incapables de jamais se mêler ni se comprendre.(103)

(最近のトンキン事件で少々横柄になったであろう中国人たちの目は、我々の到来に驚き、わたし達をじっと見つめるのである。わたし達も負けじと彼らを見返す。このように我々は、どうあっても打ち解けることも、ましてや分かりあうこともできない、異なった世界に属するあの人種に対して、冷ややかで深い好奇心を抱き、互いに見据えるのであった。)

この当時のフランスと中国との関係を概略的に述べておこう。1856年にインドシナ出兵を開始し、1862年のベトナムとフランスの間で締結されたサイゴン条約を皮切りに、フランスのベトナム植民地化は大きく前進した。しかしベトナムの宗主国を主張した中国はこの保護国化を認めず、ベトナム北部トンキン地方に出兵したことをきっかけに清仏戦争(1883-1884)へと発展していく。清仏戦争は清国に有利な戦局で進んでいたものの清朝政府が講和を急いだことにより、1885年6月に天津条約を締結、フランスの勝利という結果で終戦を迎えた。

この1か月後にあたる1885年7月から11月にかけてロチは海軍大尉、そして「トリファント号」の船長として日本に寄港した。その際に見聞したことを認めたものこそ「江戸の舞踏会」を含む『秋の日本』となる。

このような背景からもロチの中国人へのまなざしの中には、当時の社会情勢をふまえた政治的要素を多く孕んでいることは間違いない。海軍士官という社会的・政治的身分を背負いながら来日していたロチは、自分の立場を「江戸の舞踏会」でも明確に示していたのである。ロチは中国人に対し「横柄」であると非難する一方で、どこか自分たちと対等の立場にいるかのように評価する。「わたし達も負けじと彼らを見返す」や「互いに見据える」という表現のなかには、自国が勝利したとはいえ、

敵国に対する兵士としての敬意を窺い知ることができるといえよう。このような中国という「異なった世界」に対する「冷ややかで深い好奇心」こそがロチの「中国人」に対する見方である。では同じ東洋である日本へのロチからのまなざしはどうであったのか。この点については3・4で論ずる。

一方、芥川が「舞踏会」にて「中国人」に向けたまなざしとは一体どういったものであったのか。「舞踏会」では「江戸の舞踏会」に比べ、中国人の描写は細かいものではない。

「舞踏会」

二人は一足先に上つて行く支那の大官に追いついた。すると大官は肥満した體を開いて、二人を先へ通らせながら、呆れたやうな視線を明子へ投げた。(中略) 実際その夜の明子の姿は、この長い辮髪を垂れた支那の大官の眼を驚かすべく、開化の日本の美を遺憾なく具へてゐたのであつた。

「長い辮髪を垂れた支那の大官」については、原著でも同様の描写が確認できる。

「江戸の舞踏会」

A dix heures, entrée de l'ambassade du Celeste-Empire; ... Chinois de la belle race du Nord, ils ont dans leur démarche, sous leurs soies éclatantes, une grâce très noble. Et puis ils font preuve de bon goût, ceux-ci, et de dignité, en conservant leur costume national, leur longue robe magnifiquement brochée et brodée, leur rude moustache retombante et leur queue.(89)

(10時、支那公使のご入場である。(中略) 北部支那の美しい人種の方々は、華々しい絹の下潜む歩みにすら、非常に高貴な優雅さを

☆

持っていた。そしてまた、彼らは豪華なブロード織の刺繍を施した民族衣装に、荒く垂れ下がった口髭と辮髪を保つことによって、大層な気品と尊厳をも表していた。)

ロチの記した「中国人」と芥川の描いた「中国人」、どちらも長い辮髪を携えた人物ではあるものの、2つの作品から受ける印象は大きく異なったものである。このような印象の違いこそ、西洋／東洋のまなざしに加え、明治／大正というテキストの書かれた時間の差異が大きな論点となるのではないだろうか。

結果として敗戦国となった中国だが、戦中幾度となく自国に勝利していた中国人に対し、ロチは一種の敬意を示している。しかし「舞踏会」における「中国人」はそれと一変し、「肥満した體」をしており、「呆れたやうな視線」を見せ日本の開花に驚く様子は、どこか滑稽さを含んだキャラクターとして設定されている。ここにはロチが感じたような「高貴な優雅さ」や「気品と尊厳」は全く感じられない。芥川が「舞踏会」を著した1920年といえば、朝鮮を巡り日清間の対立が目立つ時期でもあった。1894年の日清戦争における日本の勝利は、当時のアジアにおける日本の地位を大きく変化させるものであった。その後も1904年の日露戦争で勝利を治めると中国大陆への野心をさらに強めることとなる。ここでは鹿鳴館の舞踏会当時は遙か大国であった中国が衰退していく様を踏まえた描写であり、ロチ同様「舞踏会」執筆当時の大正半ばの情勢を背景とした社会的・政治的要素が加わっているとも読み取ることが可能である。

しかし芥川の中国観に着目すると、また異なった見方も生まれる。「舞踏会」と同年に書かれた「愛読書の印象⁶」(1920)にて、芥川は以下のような文章を残している。

充

子供の時の愛読書は「西遊記」が第一である。これ等は今日でも

僕の愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの「天路歷程」なども到底この「西遊記」の敵ではない。それから「水滸伝」も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。

ここで注目すべき点は比喩談というところにある。西洋文学について多く書き残している芥川だが、比喩談に関しては中国の作品の方が優れているとしている。また翌年1921年の中国訪問を記した『支那遊記』（1925）においても、古き良き中国の風景というものが西洋化によって浸食され破壊されていることへの嘆きを書き残している。こういった文献から、芥川が中国に対し、当時の時代背景を文学に適應させたとは断定しがたく、むしろ「愛読書の印象」でも述べているような比喩談、つまり寓話としての中国人というものを作品の中で描いたのではないではないだろうか。「辮髪」に代表される典型的な姿のみを抜き出している点からも、一種のキャラクターとして芥川が「中国人」を取り扱っていたといえる。

芥川とロチ、両者小説家という同じ立場にいるものの、一方は政治的立場を持ち、他方はそれを持たない。そこに明治／大正という生きた時代の距離も合わさり、同じ題材のなかでこういったまなざしの差異が生まれたのではないだろうか。

3.

続いて「日本人」に向けられたまなざしを確認していこう。ロチは1885年、そして1900年から1901年にかけての二度に渡る来日経験から、本作『秋の日本』をはじめ『お菊さん』『お梅が三度目の春』を代表に、その他掌編小説もいくつか残している。このような日本を舞台にしたロチの作品群において、日本人が「猿」に例えられている描写は多く、ロチの典型的な文章の一つであるといっても過言ではない。「江戸の舞踏

穴

会」において、そのまなざしを特に一身に浴びたのは人力車を引く車夫であった。人力車は新橋駅から鹿鳴館までの交通手段として作中に登場する。

「江戸の舞踏会」では、車夫に対して *les hommes-cheveaux* (人間の馬), *un vol de corbeaux* (カラスの群れ), *une armée de diabolins* (悪魔の子の一群れ), *singe* (猿), *macaques* (マカックザル) *des fous* (狂人) の 6 つに例えており、以下引用では猿という単語が使われた部分の抜粋である。

「江戸の舞踏会」

Ils portent culotte collante, dessinant les cuisses comme un maillot; veste collante aussi, courte, à manches pagodes; chaussures d'étoffe, à orteil séparé se relevant en pince de singe; ... Avec des gestes macaques, ils se tapotent sur les jarrets, pour nous faire admirer combien les muscles en sont durs;...(80)

(彼らは水着のように太腿があらわになったぴったりとした半ズボンを履いている。また上着もぴったりとして短く、肘から裾に向かって広がったものであった。また靴の生地は、親指とその他の指が分かれており、猿のようであった(中略)彼らはマカックザルの身振りで、自分たちの足を軽く叩き、自身の筋肉がいかに堅いかを見せつけた。)

『日本印象記』

彼等は肉襦袢のやうに、股の通りに拵らへ上げた糊着の股衣を穿いてゐる。筒袖の、それも糊の着いた短衣。猿の拇のやうに、持ち上げて指を分けてある布の草鞋。(中略)猿猴類のやうな手附をして、彼等はどんなにその筋肉が硬いかほめてくれと言はぬばかりに、その脚を叩いてゐた。

「江戸の舞踏会」の引用では、*Singe* と *Macaque* を 2 つの単語を用いて猿が表現されている。プチ・ロワイヤル仏和辞典によれば *Singe* は①猿；雄猿②猿まねする人③醜くてしわだらけの人、*Macaque* は①ニホンザルなどの総称②醜男とあり、両単語も猿を表す単語であることは間違いない。高瀬訳にて対応する単語は、猿／猿猴と訳においても使い分けがなされているものの、その使い分けの差異は確認できなかった。

同じ「猿」という意味の単語をとりながら、なぜこのような使い分けがなされていたのか。「江戸の舞踏会」で猿に相当する単語が見られるのは前述のものを合わせて 4 例であり、本論でその結論を出すのは難しい。とはいえ、飯田訳において引用部に対応する箇所を見てみると、猿のほかに「怪物」「能々見れば人間」「野蠻土人」「動物」といった意識がされていることから、人間以下のものとして描こうとしていたことは明白である。ロチは自国の優位性を説いた上で、西洋に生息しない猿を用いることにより、日本というものは我々の知りえぬ未開の土地であり、人間か動物かも分からないような「猿」の住まう国であるとした。

ロチはこういった評価は『秋の日本』に収録された「京見物」の一文からも読み取れる。

『秋の日本』

Done, c'est dimanche aujourd'hui-et on s'en aperçoit parfaitement; ils commencent à singer nos allures et notre ennui de ce jour-là, ces païens. (272)

(なるほど、今日は日曜日か—と私たちは完全に悟った。つまり彼らは、この異教徒たちはこの日の私たちの振る舞いと退屈とを真似し始めたのである。)

『陸目八目』

英

本日は日曜日と云ふ、東洋の日曜日は西洋の日曜日と其質を異に

するかと見れば、敢て然らず、同じく日月火水等七曜日の一日を取つて安息日となすこと耶蘇教國の如し、彼等日本国民は余々の慣習を真似て採用せり、(中略)

『日本印象記』

ほんとに今日は日曜日だ—とわたし達はすっかり氣が附くのである。彼等はこの邪教徒は、この日のわたし達の様子なり退屈なりを模倣しだしたのであつた。

この一文では "Singer" という動詞が使用されている。これは猿を意味する *Singe* から派生した「真似る」という意味をもつ単語である。フランス語における「真似る」の意味を持つ単語は *Imiter*, *Copier*, *Contrefaire*, *Parodier*, など他にも様々見られるにも関わらず、猿の意味合いの強い *Singer* を使用するということは、ロチの日本人の近代化へのまなざしが最も強くみられる箇所であると言っても過言ではないだろう。

他に「真似」という単語が使用された箇所が「江戸の舞踏会」の最後に見られる。

「江戸の舞踏会」

Quand je songe même que ces costumes, ces manières, ce cérémonial, ces danses, étaient des choses apprises, apprises très vite, apprises par ordre impérial et peut-être à contre-cœur, je me dis que ces gens sont de bien merveilleux imitateurs....(106)

(その衣装、その振る舞い、その儀式、その舞踊が、皇室の命によって心にもなく早急に教え込まれたものであらうと考えると、これらの日本人はとても素晴らしい真似手であると思うのだ。)

ここでは真似という単語に対して *Imitateurs* という名詞を使用してお

り、*Singe* という名詞ではない。飯田訳、高瀬訳の両者を見ても翻訳は2例どちらも「真似」「模倣」であるが、このような単語を使用することにより、ロチの日本人に対するまなざしの中には、「フランス人」と「日本人」は非なる存在であるという意識が一層強く見受けられる。

加えて日本の舞踏会を風刺画で描いた画家のジョルジュ・ビゴーも、ドレスや燕尾服を着た日本人たちを猿に例えて描いていることから、西洋のような近代化を行う明治期の日本に対する猿表象とは、当時のフランスにおける一つの共通認識であったとも同時に窺い知ることができる。ロチの生きた時代から見て、18世紀西洋という過去を追う日本の姿は、ロチの眼には「猿真似」として滑稽な形で映ったのだろう。ロチはこういった日本の様子を *Cet alliage de Japon et de XVIII siècle français*. (86) (日本と18世紀フランスの混ぜ合わせ) とした。そして人力車に対するこの「人間／動物・その他」の圧倒的な力関係からみる構図は「自己／他者」「文明／野蛮」の線引きと同一視でき、19世紀ヨーロッパの文化装置としての役割をもここで示しているのだ。

4.

ロチは別著の中で以下のように鹿鳴館での舞踏会を評価した。

東京のど真ん中で催された最初のヨーロッパ式舞踏会は、まったくの猿真似であった。(中略)

この卑しい物真似は通りがかりの外国人には確かに面白いが、根本的には、この国民には趣味がないこと、国民的誇りが全く欠けていることまで示しているのである。ヨーロッパのいかなる民族も、たとえ天皇の絶対的命令に従うためとはいえ、こんなふういきょうから明日へと、伝統や習慣や衣服を投げ捨てることには肯んじないだろう。⁷

五

ここでロチは「猿真似」という単語を使用しながら、欧化による「伝統や習慣や衣服」が失われていることへの言及をしている。また次にあげる引用は、ロチが日本の伝統的な衣装をまとった人物たちに対する評価である。

「江戸の舞踏会」

Dix heures et demie; entrée des princesses du sang et des dames de la cour. Par exemple, c'est une entrée surprenante, celle-ci, autant qu'une apparition de gens d'un autre monde, de gens tombant de la lune ou bien de quelque époque perdue de passé.

.....Ces costumes qu'elles portent, on ne les a jamais vus nulle part, ni dans les rues d'aucune ville japonaise, ni sur les écrans, ni sur les images; ils sont, paraît-il, de tradition immémoriale pour la cour et ne se montrent point ailleurs.

.....On dirait des personnes échappées d'entre les feuillets de quelque vieux livre, où on les aurait conservées pendant des siècles, en les aplatissant comme des fleurs rares dans un herbier. Laidés peut-être--encore n'en suis-je pas sûr, -- laides, mais souverainement distinguées, et ayant un charme malgré tout. (90-93)

(十時半、皇族血筋のお姫様方、ならびにその侍女たちの入場。どうやら、それらは思いがけない入場であり、別世界の人々か、月から降りてきた人々か、あるいはある過去の消え去った時代の人々が出現したかのようであった。(中略)

彼女たちの着ている衣装は、未だかつてどこにおいても、日本のいかなる街中にも、屏風の上にも、絵画でも見たことのないようなものであった。それは宮廷の大昔からの伝統で、よそには現れないものに思われた。(中略)

押し花の珍しい花びらのように、平たくして何世紀もの間、古本

の1ページと一緒に保存されていたような人物のようであった。容姿は優れていない一確信はないが一容姿は優れてはいない。しかしこの上なく気品があり、そしてなお一種の魅力がある。）

ロチは日本特有の伝統的なものを纏った彼女たちに対して「この上なく気品があり、そしてなお一種の魅力がある」と述べている通り、先程までの「日本人」へのまなざしとは打って変わり称賛を向けている。しかし芥川は「舞踏会」においてロチの近代日本への批評だけでなく、その称賛さえも採用しなかった。「江戸の舞踏会」に度々登場するような「猿」のような日本人も、「フランス人」のロチが称賛した伝統文化を纏った「日本人」も「舞踏会」には現れない。近代化を目指している日本にとってそういった要素は不必要であったと芥川は判断したのだろうか。

しかしロチのみた日本の劣等性は、当時ただ一概にマイナスの要素として受容されていたわけではなかった。飯田訳では、ロチの強調する「猿」という単語を逆手に取った意識がなされている。引用は先程の「江戸の舞踏会」の対応部分である。

『陸目八目』

十時半…余は実に驚きたり肝潰れたり魂消へたり…読者よ月世界の人間が出現したり…此世の外美人が天降れり…此美人の一行は余其何の處より飛び來りたるを知らず、唯ゴロフレギロフラの音楽に連れて此鹿鳴館に現はれ給ふらるなり、…（中略）…読者、此奇妙なる衣装は、日本を除くの外世界中の絵草紙に未だ一度も書かれたる事の出來ざる有様なり、蓋し吾々の想像の届かざるダルウ井ン氏の人間が未だ猿でありし頃の大昔し、日本の一部で行はれしものが、十九世紀の今日迄傳はりて此鹿鳴館に現はれたるなり…（中略）無遠慮に是等天女の聰軀を概評すれば、恰かも古き書物の間に年久

三

額の如く、艶消へ色失せシナビ果てゝ、折もあらばはうゝの軀にて
逃げ出しさうなる姿なり…其不格合…其無風韻…其不活発…其無愛
想…誰か目にも之を浮世の外の人と見ざるを得ざるなり

「江戸の舞踏会」ではダーウィンという単語は一度にも出てこない。
しかし飯田は当時の西洋が生み出したチャールズ・ダーウィンの進化論
を逆手に取り、未開とレッテル付けされた日本を肯定する、という意趣
返しを行っている。無論、芥川が飯田訳に目を通していた事実は立証で
きていないが、こういった考えは芥川の他の作品にも登場する。『猩々
の養育院 (*Orangoutang's almshouse*)』(1909)では、森の奥深くに住む
猩々たちが、猿から進化したはずの人間のコミュニティに比べ、優れた
コミュニティを形成しているところを男たちは目にする。つまり芥川に
とって「猿表象」とは、単なる文明から未開に向けられたまなざしであ
るとは認識していなかったと捉えられる。

ここで改めて芥川が「フランス人」から「日本人」へのまなざしの一
切を削除したのかを考える。「舞踏会」では、ロチが「猿真似」と称し
た近代日本こそが最上のものであるとされ、「開花の日本の少女の美を
遺憾なく具えた」明子を中心に物語が展開していく。つまり明子を最上
のものとして描くためではなかったのか。ロチが称賛した伝統文化を纏っ
た人物は、皇族と小さいニッポンヌであった。まず皇族という身分は、
令嬢である明子よりもはるか上である。3章で結論付けたように、芥川
が「舞踏会」に政治的要素の含まなかったのならば、こういった階級的
意識の理由から削除を行ったとしても不思議ではない。
またもう一方の小さいニッポンヌについてだが、ロチは日本の女性に対
して次のような文章をいくつも残している。

五

これはあらゆる日本の女たちについていえることだ。目鼻立ちが
幼少期の漠としたところ、まだ出来上がっていない絵のように愛ら

しくて不分明なところを留めているごく若いうちは可愛らしい。

(中略) 年齢がいくや否や、老いばれ猿の面相に変わってしまう⁸

ロチは日本の女性に対し、幼少の頃は「愛らしい」が、歳をとるにつれ、顔が「老いばれ猿」のようになるとした。明子はまだ17歳だが、彼女より若いムスメを置くことで明子の美しさに陰りを見せないようにしたとも考えられる。つまり芥川は伝統的な日本の削除を行いたかったのではなく、単に明子を最上に描くためだったのではないだろうか。

5.

芥川龍之介「舞踏会」は、これまでの先行研究で明らかになっている通り、ピエール・ロチ「江戸の舞踏会」にその典拠を求めていたことは間違いない。しかし鹿鳴館を近代化に伴う西洋と東洋の文化がせめぎ合う場所と結論付けたように、同年同日の鹿鳴館での出来事を題材にすることにより、芥川とロチのまなざしの差異が顕著に浮かび上がる結果となった。

その差異は、「フランス人」から「日本人」「中国人」という西洋／東洋の関係性にとどまらず、「日本人」から「中国人」に向けられたまなざし、東洋／東洋にまで及んだ。ロチは「中国人」に対し、同じ東洋である日本人とは異なりどこか対等的な立場のように描き、明らかにそのまなざしが政治的意識下にあったことがいえる。一方芥川の描いた「中国人」にはどこか滑稽に描かれた様子から当時の日本と中国との関係性が多少反映されているとはいえるが、ロチほど政治的意識は感じられず、芥川が中国文学に求めていたような寓話的な要素が強くあったのではだろうか。

その一方でロチは日本人に対してふたつの視座を示した。ひとつは「猿」を用いた表象、もうひとつは伝統的な日本文化への称賛だ。ロチは「猿」という文明国である西洋に馴染みのない動物に例えることにより、西洋／東洋の圧倒的な差を演出した。それは同テキスト内において

同意義の単語を使い分けてしていた点、他方で伝統的文化に対しての称賛の声をあげることによる対称化という点からも、その意識が一層強いことが確認できた。

そしてこのような視座の一切を削除した芥川だが、これは物語のヒロインである明子を最上のものにするためであったと本論では結論付けた。そのためには政治的立場を持つロチのまなざしは不要であったといえる。*je garantis du reste fidèles comme ceux d'une photographie avant les retouches.* (106) (わたしはこれらが修正前の写真と同じぐらい忠実であることを保証しよう。)と記されているように、芥川は経験者の忠実な描写のみを抽出したかったのである。そのため「舞踏会」は「江戸の舞踏会」に「オマージュ」された作品であったと考える。芥川はロチの作品に隠れた意図を理解した上で、あえて自身の作品には取り入れなかった。

このように芥川龍之介とロチのまなざしは一貫して別にあった。同じ小説家という立ち位置にいたロチと芥川だが、もう一方で軍人という面も持ち合わせていたロチのまなざしの一切を「江戸の舞踏会」から受容しながらも、「舞踏会」に埋め込むことはなかった。むしろ舞踏会の開催された明治当時に西洋から猿真似と称されたものを、大正時代という未来からの視座でその美しさを描いたのではないだろうか。

注

- 1 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房、1976年、安田保雄『芥川龍之介』西東社、1956年参照
- 2 1914年、新思潮社より刊行
- 3 「外国語は英語丈が読める。他は独逸、仏蘭西、伊太利皆読めるほどではない」(芥川龍之介「私の生活」、『文学倶楽部』、1920)とあるが、手帳には時折フランス語がみられることからある程度の読み書きはできたと推測できる

- 4 1892年『婦人雑誌』初出, 1894年『陸眼八目』として刊行
- 5 ロチの来日は1885年であり実際に元となった舞踏会が行われたのは, 1885年11月3日であった。しかし「江戸の舞踏会」には「1886年11月」と書かれ, 「舞踏会」もこれに倣う形で「1886年11月3日」と設定した。吉田城はこれについて, この1年の誤差は単行本発刊時に最新の出来事として提示したかったという作者の意図ではないかとした(吉田城「ある文明開化のまなざし: 芥川龍之介『舞踏会』とピエール・ロティ」『仏文研究29』1998年)
- 6 初出『文章倶楽部 第5年第8号』1920年
- 7 船岡未利編訳, 「ニッポンの婦人たち」, 『ロチのニッポン日記—お菊さんとの奇妙な生活』有隣新書, 1976年
- 8 アラン・ケラ＝ヴィレジェ著遠藤文彦訳, 『ピエール・ロチ伝「1885年7月24日書簡より」』水声社, 2010年